

おおさか
KEY
わーど
第12回

親の子への思いがにぎわいを生んだ街

高級人形から駄菓子、「赤本」まで



写真：松屋町筋商店街の風景。「まつやま」の文字がハッキリ!!

ビルディングに囲まれた大阪の都心に生活していると、どうしても季節感に乏しくなる。しかし、幕末の錦絵「浪花百景」には数々の花の名所が描かれ、現代でも、春は造幣局の通り抜け、大阪城の梅林、秋は黄葉した御堂筋のいちよう並木などの名物があるし、天神祭りなどの祭礼や、商店街セールのディスプレイなどにも四季の変化を感じることも多い。

なにげなく散歩していて季節を感じさせる街の一つが、人形や玩具、結納品で有名な「松屋町」(中央区)である。漢字のとおり読むと〈まつやまち〉だが、地元は〈まっちゃまち〉と発音する。二つが混線し、地下鉄の車内放送で「次は「まつやまち」、人形と結納の「まっちゃまちの〇〇屋」はこちらでお降りください」と流れたりするのが面白い。

季節によって松屋町では店頭を飾る目玉商品が変わっていく。新春から三月までは、豪華な何段飾りという雛人形が並んでいたが、端午の節句を迎えるいまごろは五月人形だろう。「歴女」登場など歴史ブームもあってか、松屋町では、生きた五月人形というべき「松屋町春の陣～歩く五月人形～」のイベントが開催されている。手作りの戦国武将の甲冑を着用した甲援隊(*)の人たちが、南大江公園から出陣し、練り歩くのである。大坂城ゆかりの空堀も近い。今年も第五回「松屋町春の陣」が開催される予定である。(詳細は大阪まっちゃまち筋商店街ホームページ等でご覧下さい。)

* 甲援隊…甲冑や装束を着用し、日本伝統文化の研究および伝播と、各地(特に近畿地方)の時代祭りや武者行列などの橋渡しを目的とする有志による甲冑隊のことです。

こいのぼりも懐かしい。街なかで見ることが少なくなり、「屋根より高い」という童謡の歌詞も昔のこととなったが、私が幼かった昭和30年代、大阪の都心も高層建築が少なく、高い竿を立て、吹き流しと真鯉に緋鯉が連なったこいのぼりをあげる家が何軒もあった。

端午の節句がすすむと、松屋町には花火や浮き輪、家庭用ビニールプールなどが並びはじめる。うだるような夏の昼過ぎ、前を通るだけで海水浴客でにぎわう遠い海岸の景色が脳裏に浮かんでくる。秋はハロウィン、冬はクリスマスのイルミネーションが明滅し、正月飾りの羽子板・破魔弓も店に飾られる。そのほか、駄菓子やあてもん、プラモデルなどの専門の卸店もある。

四季折々、親が子へ寄せる思いを人形や玩具に託した松屋町には、いまでも大人の心の奥に眠る童心をくすぐる雰囲気がある。

それと戦後、松屋町は駄菓子屋で売られた「赤本」と呼ばれる子供向きの本の出版社や卸売りの店が多くあった。この出版の土壌から登場したのが漫画家・手塚治虫である。ちなみにこの春、大阪大学総合学術博物館で「阪大生・手塚治虫」展が開催される。

大阪大学創立80周年記念展
「阪大生・手塚治虫—医師か?マンガ家か?—」

日時 4月28日(木)～6月30日(木)

※日・祝休館(5月3日、4日は開館)

場所 大阪大学総合学術博物館(阪急石橋駅下車)